

Johnny Cash  
"At Folsom Prison"  
Columbia [US] ●CS9639  
[1968] ▶ソニー◎SICP30023  
incl. 'Folsom Prison Blues'

俺が初めてこの曲を聴いたのは、ジョニーがフォルサムというカリフォルニア州立の刑務所でライヴ・レコーディングした68年のアルバム『アット・フォルサム・プリズン』だった。このアルバムとシングルは、共にカントリー・チャートで1位になった。この曲は、フォルサムという監獄に捕われている囚人の話だ。ファースト・ヴァースでは、監獄の中からそばを通る列車の音がする、最後に見た太陽はいつだったか覚えてない、と歌う。セカンド・ヴァースでは、若いころ、母に銃で遊んではいけなかったと言われたのに、俺は人が死ぬのを見たかったという理由だけで殺人を犯してしまっただと歌っている。ジョニー・キャッシュはここで、一番残酷な人殺しの理由を歌詞に入れたかったそうだ。列車のホイッスルが聞こえるが、俺は留置所なので頭を垂れて泣きただけだ。サード・ヴァースでは、



# STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

## 第5回

### 日本にはない？ 哀愁のプリズン・ソングたち

タイトルにある「prison」は英語で刑務所を指す。「監獄」とも言うが、イメージ的にはプリズンのほうがヘヴィで、人殺しや犯罪者が入るところだ。対して、ジェイルは拘留所や警察署にある留置所も指す。日本ではそんな刑務所や留置所が出てくるような歌など少ないと思うが、アメリカでは結構ある。それほど身近(?)なのだろう。若い頃はバカ騒ぎをして留置所に一晚泊められたり、そんな若者を出てくる映画も多い。

そんな「身近」な例として、実は俺もアメリカでジェイルに一晚泊まったことがある。それはロサンゼルスの高級住宅地ニューポート・ビーチでの出来事だった。俺と二人の日本人サーファーでヨットハーバーのそばのバーで飲んでいたら、夜遅く、その店から出てきたら、パトカーが隠れているのが見えた。運転していた友達はまだ飲んでいなかったが、念のためにカフェで数時間過ごして酔いを覚ましてから車に乗った。彼らは前の席に、俺は後ろの席で横になった。その瞬間、急にパトカーがサイレンを鳴らしながら俺たちの車の真ん前に止まった。俺たちは表に出され、後ろ手に手錠をかけられた。そして警官が

その列車に乗っている人のことを想像している。おしゃやかなダイニング・カーで食事をし、大きなシガーを吸って、コーヒーを飲む。コーヒーを飲むなんて普通の人がする何気ないことだが、彼は罪を犯してしまったのでそんなことすら自由にできない。それが気に食わない。聞こえてくる外部の音に揺き立てられる自身の想像が、自らを拷問のように責め立てる。最後のヴァースでは、もし自由になれるなら、その列車に乗ってここから遠く離れたところに行き、列車のホイッスルに俺のブルーズ(悩みごと)や哀しみ、切なさを吹き飛ばしてもらいたい、と歌う。捕われの身の哀しさや切なさを表現した曲だ。

プリズン・ソングには、列車や母親という言葉もよく出てくる。この「グリーン、グリーン・グラス・オブ・ホーム」もその例に漏れない。もともとはカントリーのアーティスト・クロード・カリー・パトナムの曲で、65年にジョニー・ダレルとポーター・ワグナーもカヴァーし、ポーターのヴァージョンはカントリー・チャート4位まで上がった。そして、66年にトム・ジョーンズ版がリリースされ、世界最大のヒッ

こう言った。「ハンティントン(隣町)のサーファーにはこの町に来てほしくない。つまり、単なる嫌がらせで俺たちを捕まえたんだ。そしてジェイルに一晚泊まれば、無罪にしてやると言われた。それが嫌なら、血液検査と車の検査、そして俺たちの素性を調べるといふ。」

俺は問題ないと思っていたが、日本人の友達も二人とも真剣な顔をしていた。特に一人はグリーンカードを申請していたので、ビビっていた。俺は二人に心配ないと説明して、3人で一晚泊してもらおうと言った。アメリカでは、酒を飲んだからといって即運転禁止とはならない。血中のアルコール濃度がある数値を超えた段階で、飲酒運転と判断される。だから、体の大きさで飲める量が違ってくる。俺たちの場合は、警官は何も検査をしなかったし、車の鍵をイグニッションに入れてすらなかったから、裁判しても勝てるのはわかっていったんだ。

では本題に入ろう。アメリカでプリズンやジェイルの歌といえば、ジョニー・キャッシュの「フォルサム・プリズン・ブルース」だろう。もともとこの曲は、57年の彼のデビュー・アルバムに入っていた。でも



Tom Jones  
"Green, Green Grass of Home"  
Decca [UK] ●SKL4855 [1967]  
Decca [Germany] ◎820  
182-2  
incl. 'Green, Green Grass of Home'

トになった。故郷の家と緑の芝生を題材に死刑囚のことを歌った曲だ。

列車から降りると、懐かしい故郷の街が目に入ってくる。そこでは、母と父が待っている。道に目をやると恋人のメアリーが駆けてくる。緑色に茂る故郷の芝生に触れることができると幸せだと歌っている。昔の家も、ちよつと寂れているけどそのままだ。昔よく登っていた柏の木もある。皆と会えて、緑の芝生に触れ、幸せを感じると歌詞は続く。ここで急に歌ではなく、話し口調になる。彼が刑務所の中で目覚めた瞬間だ。ああ、ただの夢だったのか。周りには灰色の壁。目の前にはガードマン、そして、悲しげな牧師がいる。夜明けには彼と腕を組んで歩いていく。実は、牧師と歩くとは、死刑が執行されることを意味する。最後の部分では、俺はもう一度、緑の芝生に触れるんだ。故郷の緑の芝生の下に

僕が埋められるとき、夢の中みたいに皆があの柏の木の日陰に来て、僕を出迎えてくれる♪と歌う。なんと切ない詩だろうか。死刑になるほどの罪人でも、こんな気持ちになれるなんて救いがあると思う。

カントリー界のスター・マール・ハガードが68年にリリースした「ママ・トライド」の歌詞にも、列車と母親という言葉が出てくる。99年の「グラミー・ホール・オブ・フェイム・アワード」に選ばれた名曲だが、一般的に「スカル&ロージズ」と呼ばれているグレイトフル・デッドの71年のライヴ作『グレイトフル・デッド』にも収められていて、俺はそのアルバムで知った。71年4月26日にフィルモア・イーストで録音された音源だ。デッドはこの曲を300回以上演奏したそうだが、ライヴ・ヴァージョンでのものしか残されていないと思う。



Grateful Dead  
"Grateful Dead"  
Warner Bros. [US] ●2WS1935  
[1967] ▶ワーナー  
©WPCR15142

incl. 'Mama Tried'

この曲は、まともに育てようとした母の努力を無にしワルになってしまった息子の歌で、実際にジェイルに入ったことがあるマールの経験から作られたものだ。寂しい列車の警笛を合図に、穏やかな家庭を捨て故郷の街を旅立った男が、刑務所の中で21歳を迎える。中ほどで「life without parole」という歌詞が出てくるが、これは「仮釈放のない懲役」という意味だ。「Mama tried to raise me better. But her pleading are denied」ママは僕を真つ当に育てようと努力したけれど、彼女の願いは拒まれた。だから僕がワルになったのは自身自身のせいだ、と歌う。親不孝の代表的な曲だろう。誰にも思い当たるフシはあるかもしれないね。

サム・クックといえは「ユー・センド・ミー」だが、次に有名なのは60年にリリースされた「チェイン・ギャング」だろう。この曲はR&Bとポップ・チャート両方で第2位まで駆け上がった。「chain gang」とは、それぞれが鎖でつながれ、道路工事や畑仕事などの屋外作業で働かされる囚人のこと。55年になって、ようやくアメリカ全体で廃止になった。最後にやめたのはジ



Sam Cooke  
"Sam Cooke (Swing Low)"  
RCA Victor [US] ●LSP2293  
[1961] ▶ソニー ©SICP20322

incl. 'Chaing Gang'

ョージア州。南部でもいちばん奴隷の制度が残っていた州だからだろう。

この曲の歌詞で興味深いのは、チェイン・ギャングたちが働いている様子が伝わるような、鎖の音や「ホー、アー」という掛け声が増えられているところだ。最初の歌詞は「hear somethin' sayin'」何かが話しているのが聞こえる。ここで、人扱いでなく物扱いをしているかのように、あえて「someone」ではなく「something」という単語を使っているのも特徴だ。水をくれ、喉が渴いたんだ、俺の仕事はキツすぎる。一日中、チェイン・ギャングたちのうめき声や歌声だけが聞こえてくる…。明るい曲調の裏には、過酷な労働を強いられた同胞への思いが込められている。

ジェリー・ジェフ・ウォーカーの「ミス・ター・ボー・ジャングルズ」は、ニッティ・



Jerry Jeff Walker  
"Mr. Bojangles"  
Atco [US] ●SD33-259 [1968]  
▶Rhino [US] ©R2 71518

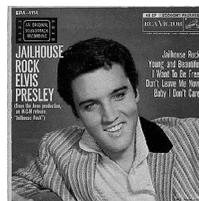
incl. 'Mr. Bojangles'

・グリティ・ダート・バンドのヴァージョンの方が有名かもしれないが、俺はこのジェリー版の方が好きだ。寂しさや悲しさがより伝わってくる。この曲はジェリーがニューオーリンズのジェイルに入っていたとき、そこで出会ったボー・ジャングルズじいさんを題材にした曲だ。実際にジェリーは酔っぱらいで、よくジェイルに入っている和有名だった。酔っぱらいが入れられるジェイルは「drunk tank」とも言う。

「Mr. Bojangles」とは、南部の祭りやミンストレル・ショウ（旅芸人のショウ）で踊りを披露しながら旅しているおじいさんのこと。擦り切れた靴を履きポロポロの服にだだだのズボン穿いた老人は、自分の人生を面白おかしく話してくれ、ジェイルの中で皆のために踊りも披露してくれたでも、15年間一緒に旅した愛犬の話になる

年が経っても、その犬の話すると涙を流すおじいさん。おじいさんはお酒とチップをもらうために踊って旅している。でもよく酔っぱらってしまうので、ジェイルの常連だ。ジェリーはこのおじいさんと話して、きつと自分自身が見えてきたんだろう。ミュージシャンもダンサーも似たもの同士。ジェリーはこの曲を3/4タイム、ワルツで書いている。踊る男の話だから、踊るリズムにしたんだろう。

エルヴィス・プレスリーの「ジェイルハウス・ロック」も有名だね。エルヴィスの67年の同名映画の主題歌で、チャートでもナンバー・ワンを飾る大ヒットとなった。州立刑務所の中で看守がパティーを開き、囚人のバンドが演奏を始めた♪と曲は始まる。でも、実はこの曲はアメリカの刑務所の中でのホモ・セクシャル社会を皮肉っているのかもしれない。歌詞の中で、囚人47番が3番に言った言葉は「You're the cutest jailbird I ever did see」君は今までに見たジェイルバードで一番かわいいよ。「jailbird」とは刑務所に捕われている人のことを指すが、ここではゲイの誘いに聞こえてしまう。「bird」には、彼女とい



Elvis Presley  
"Jailhouse Rock"  
RCA Victor [US] ●EPA4114  
[1957] (7")

incl. 'Jailhouse Rock'

う意味もあるんだ。

最後に、俺のジェイルでの話に付け加えたいことがある。最初はシャワーと排水溝しかない3メートル四方の部屋に一人ずつ入れられた。まるで「シンドラーのリスト」の部屋だった。持ち物だけでなくベルトも取り上げられ、パンツを手で持ちながら入っていた。次に鉄柵と鉄のベッドがある部屋に3人に入れられた。ガチャンといって閉められたときは、さすがに切ない気持ちになったよ。ベッドの上には薄いブランケット一枚。そして、公衆電話。誰かに電話しようと思ったけど、財布も一時的に没収されていた。たったひと晩だったけど、ほんの少し、囚人の気持ちがわかった。出る前に無罪と書かれた書類をくれた。俺の友達はその書類を今でも額に入れて大事に飾っているよ。いい経験だったな(笑)。